

# トルクメニスタン初等教育向け国定日本語教科書制作

## —初等3年生用教科書制作を中心に—

佐藤五郎

[キーワード] 初等教育、教科書制作、CEFR、年少学習者向け例示的言語能力記述文

### [要 旨]

トルクメニスタンでは、2016年9月<sup>(1)</sup>より国内12の初等中等教育機関で日本語教育が開始した。その約1年前から国定日本語教科書制作が始まり、2019年7月現在、初等1-3年生用と中等5-7年生用<sup>(2)</sup>の計6冊が発行されている。筆者は、2017年度に初等3年生用教科書の執筆を担当した。その際、学習指導要領、「年少学習者向け例示的言語能力記述文 (予備諮問版)」、それを基に作成された「学年別 can-do リスト」を参照した。教科書の全体方針は、(1) 楽しく学ぶことを優先し「積み上げ」学習は求めない、(2) 話題・場面シラバスを採用する、(3) 児童の想像力・創造力を活かす活動を設ける等に定めた。課の構成は、『まるごと 日本のことばと文化』を参考に、音声インプットからアウトプット (発話) につながる流れを重視した。教科書を使用した教師からは概ね好評価を受けたが、今後の教科書制作におけるいくつかの課題が残された。

## 1. トルクメニスタンにおける日本語教育の概要

### 1.1 日本語教育の開始と拡大

トルクメニスタンにおける日本語教育の始まりは、2007年にドゥーレットマーメットアザディ名称世界言語大学 (以下、アザディ大学) 東洋言語・文学部に日本語専攻が開設されたことによる。以後約10年間、同大学は国内唯一の日本語教育機関であったが、2015年10月に安倍晋三首相がトルクメニスタンを訪問したことを契機とし、翌2016年度よりアザディ大学以外の6大学と12の初等中等教育機関で日本語教育が始まること、トルクメニスタン政府において閣議決定された<sup>(3)</sup>。

### 1.2 初等中等教育段階における日本語教育

トルクメニスタンの初等中等教育は12年間の一貫教育である。1年生から12年生までが同じ校舎で学ぶため、「小学校」「中学校」といった区別はない。学年の呼び方は「1年生」「7年生」などであるが、本稿では教育段階を明示するため「初等/中等〇年生」と書く。各教育段階の学年と学齢、対応する日本の学年は表1の通りである。

初等中等教育では英語とロシア語が必修外国語である。また、“Specialized in Foreign

Language School”と呼ばれる外国語教育推進校では、フランス語やドイツ語などが第3外国語として教えられている。日本語教育の開始が決まった12校も“Specialized in Foreign Language

表1 初等中等教育段階

教育段階	学年	学齢	対応する日本の学年
初等	1-4年生	6-10歳	小学1-4年生
前期中等	5-10年生	11-16歳	小学5-高校1年生
後期中等	11-12年生	17-18歳	高校2-3年生

School”である。これら12校において、日本語教育は以下の要領で行われることとなった。

- (1) 中等5年生から12年生まで第3外国語として必修。ただし、首都アシガバット市内にあるアシガバット140番学校<sup>(4)</sup>では初等1年生から第2外国語として必修。
- (2) 初年度、アシガバット140番学校は初等1年生と中等5年生で開講。それ以外の学校は中等5年生で開講。翌年度以降、順次開講学年が増えていく。
- (3) 週当たりの授業数は2回<sup>(5)</sup>。1回の授業時間は、他教科と同様に初等1年生が35分、初等2年生以上が45分。

なお、トルクメニスタンの初等中等教育で使用する教科書は、全て同国教育省（以下、教育省）発行の国定教科書である。そのため、日本語も国定教科書の制作が必要となった。

## 2. 国定日本語教科書制作概要 (2015-2016年)

本章では、筆者がトルクメニスタンに派遣される前の国定教科書制作について概要を述べる。

2015年11月、教育省からアザディ大学に対し、翌年度使用する初等1年生と中等5年生用の教科書制作が依頼された。当時、同大学の日本語講師はトルクメン人3名と大学雇用の日本人1名がいたが、同日本人講師が中心となって『にほんご1』（初等1年生用）と『にほんご5』（中等5年生用）が制作された。『にほんご5』は、中等5年生用英語教科書を参照しつつ各章のテーマやシラバスを決定し制作された。一方、『にほんご1』は十分な制作時間がなかったため独自のシラバス等は作られず、トルクメン人講師が初等1年生用英語教科書をそのまま日本語訳したものが日本語教科書として発行された。

2016年9月、国際交流基金より日本語上級専門家<sup>(6)</sup>（以下、上級専門家）と日本語指導助手（以下、指導助手）が1名ずつアザディ大学に派遣され、教科書制作はこの2名が中心となることになった。上級専門家と指導助手は、まず2016年度以降の教科書制作計画を策定し（表2）、その後アザディ大学トルクメン人講師の協力を得ながら『にほんご2』『にほんご6』の制作を図1のように進めた。

表2 教科書制作計画

2016年度	2017年度	2018年度	2019年度
『にほんご2』	『にほんご3』	『にほんご4』	
『にほんご6』	『にほんご7』	『にほんご8』	『にほんご9』

教科書名の数字は学年に対応。2019年度以降は年1冊制作。

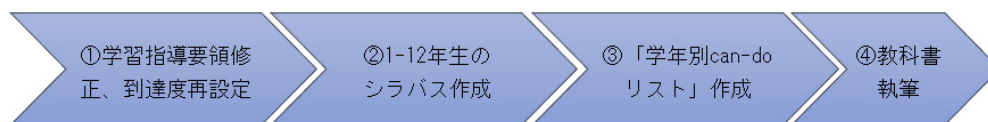


図1 『にほんご2』『にほんご6』制作手順

以下、各手順の詳細を述べる。

- ①トルクメン語で書かれた日本語学習指導要領（以下、学習指導要領）を教育省より入手し、アザディ大学トルクメン人講師らに日本語訳を依頼。内容を確認したところ、授業時間数の多い英語科目と同一の目標が設定されていたため、日本語の授業時間数に合わせ妥当な目標に修正。その際、2016年10月に公開された‘CEFR Illustrative Descriptors Extended Version 2016 (Pilot version for consultation)’（以下、「CEFR 増補版2016（諮問用パイロット版）」<sup>(7)</sup>）を参考に、学年ごとの到達度を表3のように決定。Pre-A1は、「CEFR 増補版2016（諮問用パイロット版）」で新たに設定されたA1の前段階にあたるレベルである。その後、アザディ大学トルクメン人講師らがトルクメン語に翻訳したものを教育省に提出。これが修正版学習指導要領として教育省に認可された。

表3 学年ごとの到達度

中等11-12年生	A2
中等9-10年生	A1/A2
中等7-8年生	A1
中等5-6年生	Pre-A1/A1
初等1-4年生	Pre-A1

- ②学習指導要領を基に、1年生から12年生までの大まかなシラバスを作成。
- ③‘COLLATED REPRESENTATIVE SAMPLES OF DESCRIPTORS OF LANGUAGE COMPETENCES DEVELOPED FOR YOUNG LEARNERS (Preliminary consultative edition)’（以下、「年少学習者向け例示的言語能力記述文（予備諮問版）」<sup>(8)</sup>）を基に、各学年のシラバスに合わせた can-do リスト（以下、「学年別 can-do リスト」）を作成。

「年少学習者向け例示的言語能力記述文（予備諮問版）」は、「CEFR 増補版2016（諮問用パイロット版）」と共に公開された資料で、7-10歳用と11-15歳用の2種類があり、表4のように左欄にCEFR 記述文、右欄に対応するヨーロッパ言語ポートフォリオ（ELP）の can-do 記述文が書かれている。中央欄には、そのCEFR 記述文が、対象とする年齢層の学習者にとって関連性があるかどうか書かれている。

「学年別 can-do リスト」は、学習指導要領に定められたテーマに合わせてCEFR 記述文とELP can-do 記述文が抜き出され配列されている。原文（英語）の内容をそのまま書いたものもあれば、トルクメニスタンの学習者用に書き換えたものもある（表5）。

表4 「年少学習者向け例示的言語能力記述文（予備諮問版）」の例

CEFR 記述文 (2016増補版)	7-10歳との関連	ELP can-do 記述文
聞くこと全般		聞くこと全般
Pre-A1		Pre-A1
意味が明瞭でなじみのある日常的な文脈の中で、ゆっくりはっきり話されれば、毎日使われよく知っている言葉がわかる。	関連あり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校に着て行く服の名前や、学校で食べる物の名前がわかる。</li> <li>・色や形を表す単語がわかる。</li> </ul>

Council of Europe (2016 : 25) 原文は英語。一部を抜き出し筆者が翻訳。

表5 「学年別 can-do リスト」の例 (2年生)

テーマ	聞く	読む	やりとり	表現 (言う)
私の身の回り	家にある自分の物、衣服などの名前を聞き取れる。	身の回りにある食べ物や衣服の名前を読んでわかる。		自分の持ち物を言うことができる。

④各学年のシラバスと「学年別 can-do リスト」を参照しつつ教科書執筆。上級専門家が『にほんご2』、指導助手が『にほんご6』を担当。教科書中の指示文等はアザディ大学トルクメン人講師が必要に応じてトルクメン語に翻訳。

### 3. 『にほんご3』制作概要 (2017年)

筆者は2017年6月に2代目の上級専門家として派遣された。同年は『にほんご3』と『にほんご7』の制作が決定しており、筆者が『にほんご3』、指導助手が『にほんご7』を制作することとした。『にほんご3』執筆を始めるにあたり、図2の手順で準備を進めた。本章では、この手順①-④について述べる。

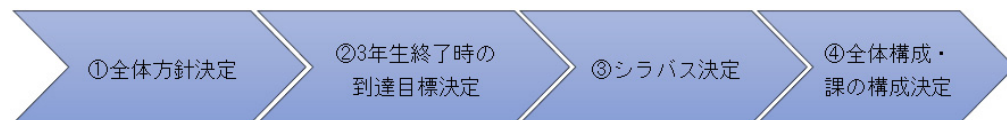


図2 『にほんご3』執筆前準備手順

#### 3.1 「①全体方針の決定」

国定教科書は、トルクメニスタンが定める日本語教育の目的と目標（日本語教育を通じてどのような児童・生徒を育成したいのか）を具現化したものでなければならない。そこで、まず学習指導要領を基に『にほんご3』の全体方針を決めることとした。

学習指導要領の序文には、外国語教育の目的が主に3つ述べられている。それを基に、表6のように方針を定めた。表の左欄は、学習指導要領本文を筆者が要約したものである。

表6 学習指導要領と『にほんご3』全体方針

学習指導要領「外国語教育の目的」	方針
①コミュニケーション手段として外国語を教え、その言語を話すための能力を育成する。	聞く・話す活動を中心に
②外国語学習を通して、児童は他国の文化や伝統、習慣を学ぶ。	日本文化に触れる活動を設ける。
③外国語学習を通して、児童の創造力を育む。	児童の想像力・創造力を活かす多様な活動を設ける。

また、これら以外に、初等教育における日本語の位置づけと児童の発達段階を考慮し、以下の4点も方針とした。

(1) 楽しく学ぶ

日本語は週2回だけで、トルクメン語や算数といった主要教科と比べると、児童にとって重要性は相対的に低い。その一方で、中等12年生までの長きにわたり学び続ける教科でもある。初等段階で日本語嫌いを作らないためにも、楽しく学ぶことを最優先する。

(2) 「積み上げ」を求めない

「楽しく学ぶ」を実現させるために、いわゆる「積み上げ式」の授業は行わない。『にほんご3』は1章完結を原則とし、既習項目を覚えていなくても、その後の章の学習でつまづくことがないようにシラバス作成に配慮する。また、初等1、2年次の既習語彙・表現が再度提出される場合でも、毎回新出語として導入する。さらに、児童は提出された語彙を全て覚える必要はなく、自分にとって関係・関心のある単語を選択し学ぶ。

(3) 文型・文法を教えない

9-10歳児の認知発達度を考えると、文型や文法を体系的に捉えることはまだ難しいと思われる。従って、文型・文法として学ばせるのではなく、フレーズとして覚えるものとする。教師用指導書にもその旨を記し、文法説明を避けるよう指示する。

(4) 教科横断を意識する

扱うトピックや教科書中の練習を他教科の既習項目と関連付けることにより、児童の興味を喚起するとともに、理解や記憶が強化されることを期待する。

### 3.2 「②3年生終了時の到達目標の決定」

学習指導要領に定められた初等3年生終了時の到達目標が Pre-A1レベルとして妥当なものかどうか、再度確認を行った。確認作業は、到達目標を「年少学習者向け例示的言語能力記述文（予備諮問版）」のCEFR 記述文（7-10歳、Pre-A1）と対比させながら行った（表7）。

「書くこと」だけ対応する記述文がなかったが、到達目標は概ね妥当であることが確認された。一方、「読むこと」は「簡単で長くないテキストの理解」も目標とされていたが、文字学習が中等5年生から始まるため初等3年生には適当でないと考え、削除した。

表7 3年生終了時の到達目標<sup>⑨</sup>

到達目標	CEFR 記述文 (7-10歳、Pre-A1)
1. 聞くこと ゆっくりはっきり話され、何度か繰り返してもらえれば、教師の簡単な指示や同級生の依頼を理解し、それを実行することができる。	意味が明瞭で馴染みのある日常的な文脈の中で、ゆっくりはっきりと話されれば、毎日使われよく知っている言葉がわかる。(聞くこと全般)
2. 会話 会話モデルを参照しながら簡単な質問・回答を行うことができる。	短い定型表現を使用したり、情報を補強するためにジェスチャーに頼ったりすれば、自分自身や毎日繰り返す事柄について質問・回答を行うことができる。(口頭のやりとり全般)
3. 独話 既習テーマの範囲内であれば、自分自身や身近な物などについて簡単に話すことができる。	基本的な個人情報(名前、住所、家族、国籍等)を提供するために、自分自身について短い文で話すことができる。(話すこと全般)
4. 読むこと 絵や写真が添えられた既習語であれば、音と文字を対応させながら読んでみるができる。	ファストフード店の写真付きメニューや、よく知っている語彙が使われた絵本などのように、絵や写真などが添えられた馴染みのある単語を理解することができる。(読むこと全般)
5. 書くこと 既習語であれば、語句や文の書写ができる。	

到達目標は原文(日本語)抜き出し。CEFR 記述文は原文(英語)を筆者が翻訳。

### 3.3 「③シラバスの決定」

#### 3.3.1 シラバスの種類

「積み上げ」を求めない1章完結型教科書に適していること、また、児童にとって馴染みのある話題や場面を扱うことによって興味・学習意欲の喚起が期待できることから、話題シラバスと場面シラバスを採用することとした。そして、章ごとに1つのテーマを設け、そのテーマに合わせた場面や話題を

表8 『にほんご3』章と課のタイトル

取り上げることにした。テーマは既に学習指導要領で6つ定められていたものの、中には初等3年生の知的・認知的発達段階で扱うのが難しいテーマもあったため、それらは削除した。さらに、全

第1章 私の家族	1課 自分のこと	第5章 動物	1課 身近な動物
	2課 家族のこと		2課 動物園
第2章 私の身の回り	1課 形と色	第6章 買い物と食べ物	1課 買い物
	2課 服と持ち物		2課 食べ物
第3章 友達	1課 友達	第7章 体と健康	1課 体
	2課 友達と遊ぶ		2課 健康
第4章 学校	1課 授業	第8章 誕生日	1課 私の誕生日
	2課 時間		2課 プレゼント

教科書中は全てひらがな・カタカナ表記。

8章構成とするため、学習指導要領で定められていた以外のものも付け足した<sup>(10)</sup>。全8章とした理由は、次節で述べる。これらの変更については、教育省管轄の教育研究機関であるトルクメニスタン国民教育大学<sup>(11)</sup>と協議し、了承を得た。



### 3.3.2 学習項目

学習指導要領では初等3年生で学ぶ文型や語彙・表現が明確に指定されていなかったため、筆者自身が定めた。本来なら、卒業までの12年間で学ぶべき文型や語彙を決めてから、各学年のシラバスを作成すべきである。しかし、教科書制作人員が少ない上に教科書第1稿完成期限まで約半年しかなかったため、それを行うことは現実的ではなかった。従って、『にほんご3』の文型や語彙・表現は、『にほんご2』の学習項目を参照すると同時に、初等4年生の学習項目をある程度想定しながら決めていった。なお、4.7で文字の扱いについて述べる。

### 3.4 「④全体構成と課の構成の決定」

全体構成と課の構成を決める際は、教師にとっての使いやすさを重視した。教科書執筆を開始した2017年9月当時、初等中等教師16名のうち15名がアザディ大学の卒業生だったが、彼ら・彼女らは在学中に日本語教授法についてほとんど学んでおらず、日本語教師としての経験も2年未満だった。そのため、①授業進度が速すぎて学習項目の理解・定着が不十分（教科書中の1つ1つの練習にかける時間が短い）、②授業活動のバリエーションが少ない（リピートや教科書の音読、トルクメン語への翻訳がほとんど）という問題が共通して見られた<sup>(12)</sup>。

そこで、教科書がこれらの問題を解決する手段となるよう、次のように構成を決定した。

#### 3.4.1 全体構成

初等中等教育は4学期制で、1つの学期は約2か月である。そこで、1か月に1章ずつ終わることを想定し全8章構成とした。さらに、1章を2課ずつに分けた（表9）。

表9 学期と章の対応

1学期 (9-10月)		2学期 (11-12月)		3学期 (1月中旬-3月中旬)		4学期 (4-5月)	
第1章	第2章	第3章	第4章	第5章	第6章	第7章	第8章
1課	2課	1課	2課	1課	2課	1課	2課

続いて、1章当たりのページ数を決定した。「授業1回＝教科書1ページ」という授業進度の原則を定め、1つのページに授業1回分（45分）の内容（学習項目や練習等）を収めることにした。日本語授業は週2回なので、1か月を4週間とすれば、8回（＝8ページ）で1章を終えることになる。これに扉ページと章末の読み・書き練習のページを足し、1章は10ページで構成することとした。扉ページと2ページ目を初回授業で行い、読み・書き練習のページは宿題を基本とする。これで1章を8回の授業で終了することができる（表10）。

表10 ページと授業回数の対応

第1章									
1課					2課				読み書き
P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
第1回		第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	宿題

「P」はページを表す。P1は「扉ページ」である。

### 3.4.2 課の構成

柴原・島田 (2008: 42) は、これからの教材作成に求められることの1つとして、「どう教えたら効果的かを想定して1課を構成し、練習の過程・種類・性質のバリエーションを考慮した練習を設計」することを挙げている。『にほんご3』もこの考えに則り、できるだけ多様な種類の練習を、到達目標に向かって配列することとした。

練習の種類や配列のし方は、『まるごと 日本のことばと文化』を参考にした。同教科書の開発者である来嶋他 (2014: 119) は、「SLA が外国語教育の実践に向けて示唆することは、アウトプット (言語の産出活動) のためにはインプット (言語情報の受容) が必須であること、文脈や背景知識を使ってインプットの理解を促進することが重要であること、アウトプットの機会もまた必須であることなどがある」と述べている。また、インプットに関しては、来嶋他 (2012: 111-112) で「海外において特に不足しがちな音声によるインプットを重視している。学習者が自然な日本語を聞けるように、縮約形や助詞の省略、倒置など、音声と日本語の表現の上でバリエーションをつけた」と述べている。

そこで、『にほんご3』でも、音声インプットからアウトプット (発話) へとつながる流れを重視し、「音声による新出語導入⇒聴解問題 (テキストの中での新出語の聞き取り) ⇒発話練習 (独話／やりとり)」という構成を基本とした。そして、課全体の構成と各パートの名称を表11のように定めた。

表11 課の構成

4回の授業を通して段階的に到達目標に達することができるように、新出語は数回に分けて導入し、それに合わせて聞き取り練習も複数回行うこととした。発話練習も、1文独話から2-3文独話、或いは1ターンのやりとり

各パートの名称	内容
①もくひょう (maksady)	課の目標
②きいてみよう ことば	新出語の導入
③きいてみよう もんだい	テキストの中での新出語の聞き取り
④いってみよう	発話練習 (独話／やりとり)
⑤できましたか?	到達度の自己評価
やってみよう	既習語の復習、創作活動など

りから2-3ターンのやりとりへと無理なく進めるよう、何回かに分けて行うこととした。また、②～④の間に「やってみよう」を適宜挿入し、既習語の定着も図ることとした。



### 3.4.3 課の到達目標の設定

課の到達目標は、その課で行う言語活動を考えながら、対応する can-do を「学年別 can-do リスト」から選んでいった。適当な can-do がない場合は、同リストの出典元である「年少学習者向け例示的言語能力記述文（予備諮問版）」の CEFR 記述文の中から探し出した。CEFR 記述文には抽象的なものもあったが、それらは課の内容や言語活動（独話かやりとりか等）に基づいて具体的記述に変えた。例えば、第1章1課「自分のこと」の到達目標は、「事前に準備することができれば、簡単な単語や定型表現を使って自分自身（名前、年齢、家族など）について述べることができる」（独話：経験を述べる Pre-A1）を基に、「自分の名前、年齢、学年を言うことができる」とした。

なお、初等1、2年次にも扱ったテーマが再登場する場合は、前学年より少しだけ詳しい内容が言えるように目標を設定した。初等1、2年次と全く同じことをして児童が飽きるのを避けるためと、言語操作能力の発達に合わせた難度を設定するためである。

## 3.5 その他

### 3.5.1 付属教材

教科書の付属教材として、ワークブック、新出語や聴解問題等の音声ファイル、教師用指導書を作成した。音声ファイルと教師用指導書は1枚の CD に収録した。

ワークブックは、トルクメニスタンの国定教科書が貸与制で書き込み禁止であるため、聴解問題の解答記入や章末の書き練習に使用する目的で作成した。音声ファイルは、筆者がスクリプトを作成し、在留邦人の方々の協力を得て録音した。教師用指導書には、教科書に指示文が書いていない練習や、教師にとって不慣れと思われる練習について、詳しい手順や実施上の注意点を書いた。教師たちの日本語レベルと恒常的な忙しさに配慮し、必要最低限のことを1章当たり A4用紙2ページ以内に収めた。表記は日本語で、ほぼ全ての漢字にルビを付けた。

### 3.5.2 パイロット授業

数章が完成した時点で、アシガバット140番学校でパイロット授業を行った（表12）。当時日本語が未習だった初等3年生から希望者を募り、土曜日の放課後に特別授業として実施した。本来は実際の教科書使用

表12 『にほんご3』制作工程

2017年 9月	執筆開始
11月	アシガバット140番学校にてパイロット授業
2018年 3月	第1稿提出
6月	出版社にて校正・編集作業開始、CD録音
8月	校了
9月	発行

者であるトルクメン人教師が授業を行うのが適当であるが、できるだけ教師に負担をかけないように筆者自身が行うこととした。トルクメン人教師には通訳として参加してもらった。

パイロット授業の目的は、次の3点を確認することである。①1ページ当たりの分量は適当か、②到達目標の難易度は適当か、③内容は児童の興味を引くものとなっているか。

1課分全4回の授業を行った結果、ページによっては分量が少ないことや、思っていた以上に児童の集中力は持続しないこと、それゆえに短い間隔で次々と様々な練習を行った方が良く、体を動かしながらの発話練習が効果的であること等がわかった。得られた結果は、その後の執筆内容に反映させるとともに、既に完成した章に修正を加える際の参考にした。また、体を動かしたりゲーム性を含んだりした様々な練習を考案した<sup>(13)</sup>。

#### 4. 『にほんご3』 詳細

第1章1課を例に、各パートの目的や授業の進め方について説明する。説明に適当な例がない場合は、他の章の一部を用いる。

##### 4.1 扉ページ

章の始めの扉ページは、その章のテーマに関するスキーマを活性化しつつ、児童の興味を喚起することを目的としている。

「もくひょう」は、教師が児童とともに確認できるように日本語とトルクメン語で書かれている。第1章の「もくひょう」は、「自分の名前、年齢、学年を言うことができる」と「家族について簡単に紹介することができる(何人? 誰がいる?)」で、それぞれ1課と2課の到達目標である。なお、「もくひょう」は1課と2課の冒頭にもそれぞれ再掲載されている。

ページ中央の絵は、章のテーマに関連したもので、その下には絵を見ながら教師が児童に問かける質問が2つある。1つ目の質問は絵を見ながら答えるもの、2つ目は児童自身のことについて答えるものである。第1章であれば、それぞれ「上の絵の中に誰がいますか」「あなたの家族は何人ですか、誰がいますか」である。



図3 第1章扉ページ

#### 4.2 「きいてみよう ことば」

このパートでは、音声と絵を用いて新出語の導入を行う。まずCDを聞き、その後、CDや教師の発話を聞きながら該当する絵や文字を指さしたり、教師の後に続いてリピート練習を行ったりすることを想定している。新出語が具体物を表す語の場合、意味を推測したり単語を覚える際の手助けとしたりするため、必ず絵が添えてある。

聞かせる音声は、単語のみの場合もあれば、文の場合もある。文を聞かせる場合、既習項目を手掛かりに文全体の意味を理解するとともに、新出語に注目できるようにしてある。例えば、第1章2課の「きいてみよう ことば①」(図4)では、「ぼくの/私の家族は～人です」という文を聞かせて人数の言い方を導入する。児童にとって「ぼく/私」と数字は既習項目なので、絵を手掛かりに「家族の人数を言っている」と推測できると同時に、新出語「～人」に注目することができる。



図4 第1章2課「きいてみよう ことば①」

#### 4.3 「きいてみよう もんだい」

このパートは、「きいてみよう ことば」で導入した新出語をテキストの中で聞き取りながら、定着を図ることを目的としている。同時に、そのテキストはこの後の「いってみよう」で発話する内容であるため、先行してそれをインプットするという狙いもある。

解答は全てワークブックに書き込む(図5、図6)。文字で解答を書かせることを極力避けるため、○を付ける、記号を書くなどの方法を採用している。

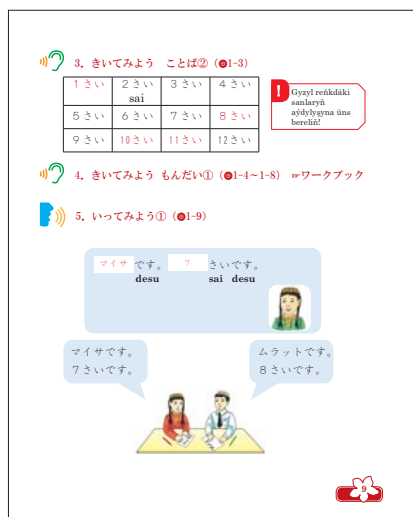


図5 第1章1課3ページ目

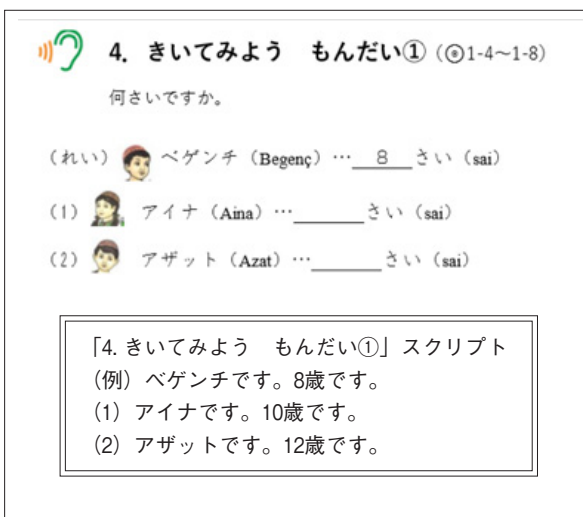


図6 第1章1課「きいてみよう もんだい①」のワークブックとスクリプトの一部

インプットするテキストがやりとりの場合、その後の「いってみよう」で練習する“基本形” (図7の下線部) だけでなく、フィラーの挿入や倒置、聞き返しなどを含んだ複数のバージョンを聞く。授業以外に日本語を聞く機会がほとんどない児童が、できるだけ自然でバリエーション豊かな日本語を聞く機会とするためである。また、やりとりの中で登場人物たちが置かれている状況や個々の性格などが垣間見えることで、児童が楽しんで聞いてくれることも期待している。

[2. きいてみよう もんだい①] スクリプト  
 (例) A: すみません、今、何時ですか。  
 B: 8時です。  
 A: ありがとうございます。  
 (1) A: すみません、今、何時ですか。  
 B: 3時です。  
 A: ああ、3時。ありがとうございます。  
 (2) A: すみません、あの～今、何時ですか。  
 B: 4時です。  
 A: え? 4時ですか?  
 B: はい、4時です。  
 A: あ、ありがとうございます～す!

図7 第4章2課「きいてみよう もんだい①」スクリプト

#### 4.4 「いってみよう」

「いってみよう」は、発話を促す手段として、絵を描いたりトルクメン文字で文を書いたりする活動が取り入れられている。図5の「いってみよう①」では、小さいカードに自分の名前をトルクメン語で書き、それを名刺のように交換しながら発話するよう指示されている。


#### 4.5 「やってみよう」

このパートは、既習語の復習と創作活動が主である。教科横断、児童の想像力・創造力の活用、日本文化体験の提供といった特色がある。

図8の「やってみよう①」は、数字1～20の定着練習で、算数の知識を利用しながら言葉进行操作する活動である。ワークブックに「さん (san) +さん (san) = \_\_\_」のような問題があり、児童は答えを算用数字 (6) ではなく文字 (roku/ろく) で書く。

図9は、想像力・創造力を活かした活動例である。第2章1課の到達目標は「身の回りにある物について、形や色を言うことができる」なので、この活動を通して形を表す語彙と「大きい」「小さい」

の定着を狙っている。日本文化体験活動の例としては、日本語による動物の鳴き声を真似てみる活動や、折り紙の毬作り、手遊び歌などがある。

2. やってみよう①  ワークブック  
 日本語で計算してみましょう。

(れい) いち (içi) + いち (içi) = に (ni)  
 1 1 2

図8 第1章1課「やってみよう①」

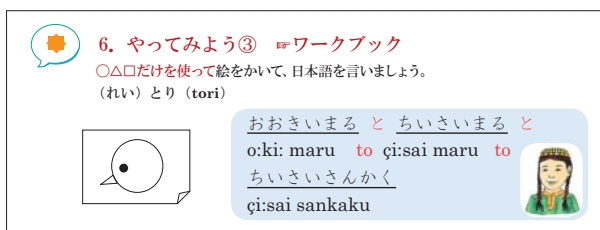


図9 第2章1課2ページ目「やってみよう③」

#### 4.6 「できましたか？」

1つの課が終わると、3段階で到達度を自己評価する。児童は課末にある「もくひょう」をもう一度読み、自己評価を「よくできる」～「できない」の中から1つ選ぶ（図10）。そして、ワークブックに描かれた○の中に該当する顔を描き込む（図11）。児童が楽しんで取り組めるようにこの方法を考案した。

#### 4.7 「よむれんしゅう・かくれんしゅう」

文字学習は中等5年生から開始すると学習指導要領に定められているため、『にほんご3』のシラバスには含まれない。しかし、中等5年生から突然文字学習を始めるのは児童にとって負担が大きい。そこで、少しずつ読むこと・書くことに慣れる目的で、このパートを設けた。児童は、絵を見ながらひらがなを読んだり、薄く書かれた文字をなぞり書きしたりする（図12）。

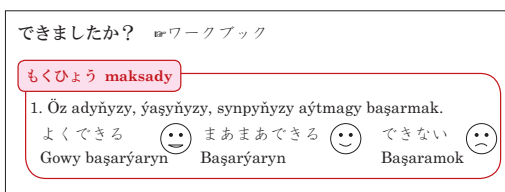


図10 第1章「できましたか？」

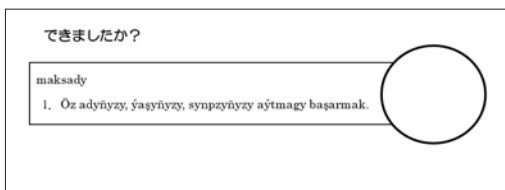


図11 第1章「できましたか？」ワークブック

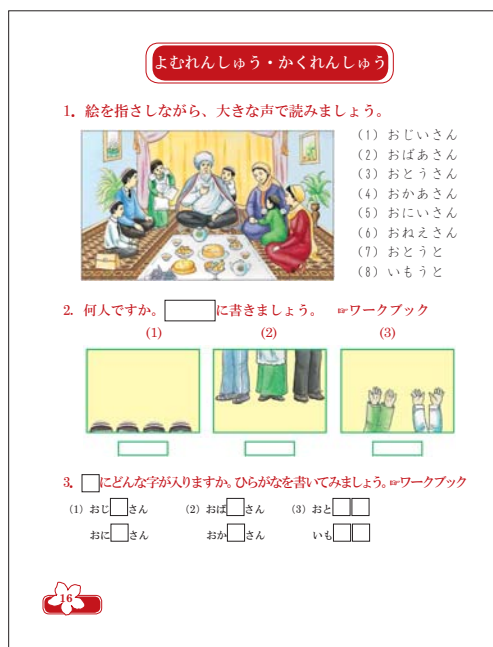


図12 第1章「よむれんしゅう・かくれんしゅう」

## 5. 教師からのフィードバックと改善点

教科書発行後、何度か授業見学を行い、教師から次のようなフィードバックを得た。

- ・絵を描く等の創作活動が多いので、児童が楽しんで勉強している。
- ・1ページの内容量は適当。
- ・練習の行い方が教科書に書いてあるので、教師にとってわかりやすい。
- ・短く簡単な読み物があると良い。

また、筆者自身もいくつか改善点を発見した。

- ・「いってみよう」で自分のことについて言えるようになるには、「きいてみよう もんだい」の後に、もう1つステップがあると良い。例えば、絵をキューにした代入練習などである。
- ・児童同士の会話は、丁寧形ではなく普通形にした方が自然である。
- ・練習の指示文などは、教師が読むことだけを想定し日本語で表記したが、その結果、児童にとって意味をなさない文字の羅列が多くなった。これらも全てトルクメン語にした方が良い。

## 6. 国定日本語教科書制作の今後の課題

教科書制作は2023年まで続き、複数の上級専門家が交代で執筆に携わる予定である。また、教科書制作と並行して既刊教科書の改訂作業も行われる。初等1-4年生用は3年ごと、中等5年生用以上は5年ごとの改訂が、教育省により義務付けられているためである。

このような状況に照らすと、今後の教科書制作については次のような課題がある。

### (1) 一貫性の設定

教科書シリーズを制作する場合、複数名でチームを組み、時間をかけて制作方針やシラバス等について協議・決定するのが一般的である。しかし、トルクメニスタンでは上級専門家1人が執筆者で、数年ごとに交代していくため、それを行うのが難しい。とはいえ、全12冊が揃った時、方針に一貫性が見られないのは教科書の在り方として望ましくない。そのため、将来的には全冊を貫く方針を定め、章や課の構成等も統一することが必要である。

### (2) シラバスの整理

テーマ、文型や語彙・表現の配列などを学年ごとに整理する必要がある。また、漢字については導入時期や導入文字数、到達目標などが定められていないため、これらを定めることは喫緊の課題である。

### (3) 評価基準の設定・評価方法の決定

学習指導要領に定められた、各学年終了時の到達目標がどの程度達成できたかを測る評価基準と、その方法が定められていない。『まるごと 日本のことばと文化』のようにテス



ト例を提供するのも一案だが、そのためには、学校で試験や成績処理がどのように行われているのかを把握する必要がある。

#### (4) トルクメン人日本語教師との共同執筆

2019年現在、教科書を執筆するのに十分な日本語力や日本語教育に関する知識と経験を有するトルクメン人教師はいない。しかし、トルクメニスタンで使用する教科書を、外国人である上級専門家だけで執筆するのは望ましいことではない。数年後の教科書改訂の際にシラバス修正に参加してもらうなど、できることから始める必要がある。また、それと同時にトルクメン人教師の日本語教育に関する知識の拡充や教授技術の向上を支援していくことも必要である。

いずれの課題も、教育省やアザディ大学等の関係諸機関や、アザディ大学トルクメン人日本語講師らの理解と協力が不可欠である。その点から考えても、教科書制作に携わる機関・人員で制作チームを結成し協働していくことが望まれる。

国定教科書『にほんご』シリーズで学ぶ児童が、日本語の授業を楽しいと感じ、日本語や日本文化を学ぶ中で、想像力・創造力を活かしながら能力を広げていってくれることを願う。

#### [注]

- <sup>(1)</sup>トルクメニスタンの教育機関は9月始まりである。
- <sup>(2)</sup>初等1-3年生は日本の小学1-3年生に相当。中等5-7年生は同じく小学5-中学1年生に相当。
- <sup>(3)</sup>トルクメニスタン政府が公文書を公開していないため、アザディ大学以外の高等教育機関と初等中等教育段階で日本語教育を開始した理由は不明である。
- <sup>(4)</sup>アシガバット140番学校は、首都アシガバット市内にある2016年度新設校。別名を「トルクメニスタン-日本学校」と言い、理系科目と日本語教育に力を入れている。日本語は英語に次ぐ第2外国語である。
- <sup>(5)</sup>2017年6月、教育省によってアシガバット140番学校の日本語カリキュラムが見直され、2020年度より中等5年生以上で週3回授業が実施されることとなった。
- <sup>(6)</sup>初代上級専門家の任期は2016年9月-2017年2月。
- <sup>(7)</sup>‘CEFR Illustrative Descriptors Extended Version 2016 (Pilot version for consultation)’は英語で書かれた資料。「CEFR 増補版2016 (諮問用パイロット版)」は筆者自身による翻訳である。なお、この資料の完成版は、2018年に‘CEFR Companion Volume with New Descriptors’として公開された。
- <sup>(8)</sup>‘COLLATED REPRESENTATIVE SAMPLES OF DESCRIPTORS OF LANGUAGE COMPETENCES DEVELOPED FOR YOUNG LEARNERS (Preliminary consultative edition)’は英語で書かれた資料。「年少学習者向け例示的言語能力記述文 (予備諮問版)」は筆者自身による翻訳である。
- <sup>(9)</sup>表中の CEFR 記述文は、それぞれ「年少学習者向け例示的言語能力記述文 (予備諮問版)」の中の以下のページから抽出した。  
聞くこと全般：26、口頭のやりとり全般：34、話すこと全般：46、読むこと全般：29
- <sup>(10)</sup>「私の国と私」というテーマでは、下位テーマとして「国の象徴」「独立国家トルクメニスタン」等が設けられていたが、9-10歳の児童にとって、独立国家や象徴といった概念は理解するのが困難である。他に削除したテーマは「文化と私」。新たに付け足したのは、第2章、第6章、第7章、第8章の4つである。
- <sup>(11)</sup>同機関は、初等教育や英語教育等の専門員を有し、初等中等教育段階のカリキュラム・教科書制作も担当している。国定日本語教科書の制作は、教育省から同機関を通じてアザディ大学に依頼された。
- <sup>(12)</sup>これらの問題は、機関訪問時の授業見学や、教師研修で行った模擬授業を通して把握した。

<sup>13)</sup> 日本の小学生向け英語教材 (陰山英男監修『しゃべって覚える小学生の英会話 Talking Time2』学研教育出版)などを参考にした。

〔参考文献〕

- 来嶋洋美・柴原智代・八田直美 (2012) 「JF 日本語教育スタンダード準拠コースブックの開発」『国際交流基金日本語教育紀要』8、103-117
- 来嶋洋美・柴原智代・八田直美 (2014) 「『まるごと 日本のことばと文化』における海外の日本語教育のための試み」『国際交流基金日本語教育紀要』10、115-129
- 柴原智代・島田徳子 (2008) 「これからの日本語学習を教材で支援するために必要なこと」『日本語教育論集』24、33-47
- Council of Europe (2016). *COLLATED REPRESENTATIVE SAMPLES OF DESCRIPTORS OF LANGUAGE COMPETENCES DEVELOPED FOR YOUNG LEARNERS AGED 7-10 YEARS (Preliminary consultative edition)* <<https://rm.coe.int/0900001680697fca>> (2019年7月2日)